



イギリス科ニュースレター No. 12 / April 2006

東京大学教養学部地域文化研究学科イギリス分科
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 (9号館323号室)
Tel/Fax 03-5454-6304 (イギリス科研究室直通)
E-Mail: british@ask.c.u-tokyo.ac.jp
Home Page: <http://British-Section.c.u-tokyo.ac.jp>



主任挨拶 — 三つのなぜ? —

安西信一

この度、伝統あるイギリス科の「主任」なるものに就任してしまいました。なぜ、私のような研究者としても、教育者としてもうだが上がらず、行政手腕も教養もない者が主任なのかと、訝しがられる方も多いでしょう。他ならぬ私自身、最も疑問に感じています。直接の理由は単純です。他のもっと適当な先生方が、忙しすぎるからです。駒場（だけではないでしょうが）の教育研究環境は、一見よくなっているようで、実は大変窮屈になっています。予算縮小、事務方や助手の人員削減、それに伴う雑事の激増、授業や業績の（近視眼的）評価、いわゆる学生の学力低下と学生指導の重圧、競争的外部資金の獲得（加えて今年はイギリス科の場合引越し）等々。環境を呪うのは自らの非力を際立たせるだけでしょうが、それにしても忙しい。そんな中、いかにも間抜け面の私に白羽の矢が立ったわけです。

ではそもそもなぜ、私はイギリス科にいるのでしょうか。私は美学出身で、必ずしもイギリスが専門でなく、英語に至ってはズブの素人です。そんな私がイギリスを研究している直接の理由も、或る意味単純です。要するに偶然です。私は大学に入る頃から、庭園や環境が、美学の中でまともに取り上げられないのがずっと不満でした。そこで当時ほとんど未開の分野だった、庭園の美学のようなものを考えてみたいと思い始めた。けれどもこの分野の文献はほとんどなく、辛うじて見つけたドイツのヒルシュフェルトという美学者の庭園論は、実はイギリスの受け売りとわかりました。そして調べてゆくうち、「ガーデニング」の国イギリスには、哲学的な庭園美学とはいえなくても、その萌芽のような文献が多数あることを知りました。そこで偶々、イギリスを研究するように

なったのです。

とはいえ、環境や偶然のせいによ主任になった以上、私には次のもっと根本的な「なぜ」に答える義務が生じてきたように思います——自らにも、他者にも。「なぜ今、わざわざ日本でイギリスを研究するのか」という疑問です。これだけ学問の国際的なバリアーが低くなり、留学も容易になっている今日、イギリス自体を研究したいなら、イギリスに行く方がはるかに手取り早いでしょう。我国には昔から、イギリスの暮らしや文物を紹介する「イギリス物」というジャンルの書物があり、ブームの波はあるものの、いまだ一定の人気を誇っています。しかしその手の蘊蓄を得たいなら、わざわざ日本で「研究」する必要などなく、イギリスで暮らすだけで十分、否、ずっと効果的ではないか。実際、近年のイギリス物の著者は研究者とは限らず、主婦だったり、(元)OLだったりします（むろん彼女らを蔑みたいわけではありません）。

なるほどこの「なぜ」には、様々な答えが思いつきます。私の場合なら、イギリス自体は目的ではなく、庭園美学を構築する手段にすぎないのだから、日本で研究することにも一定の意味があるとか（因みに白状すると、私はイギリスの庭よりも、日本の庭の方が圧倒的に好きです）。また一般には、完全にイギリスの大学に留学してしまうには様々な障害があるとか。イギリス以外のことを十分学びつつイギリスを学ぶには、日本にいるのが効率的だとか。母国語での思考や討論の方が、いっそう深く批判的だとか。イギリスに埋没せず、日本で距離を置き、批判と比較の視点を確保しておく方がよいとか。しかも日本には、ユニークで重要なイギリス研究の伝統がある等々。

しかし少なくとも私には、どうしても違和感が残ってしまう。それはもしかすると、イギリスを含む西欧

に対する、近代日本のコンプレックスへの違和感かもしれません。或いはもっと直裁に、西洋中心主義のイデオロギーへの違和感という方がいいでしょうか。さらに私の場合、イギリス科の長く栄えある伝統の重みに耐えかね、そこから逃避したいという心理が、違和感として発現しているのかもしれませんが。ただ、やけくそついでに開き直ってしまうと、この「なぜ」の答えを探し続けることは、イギリス科に属する者の、永遠の課題ではないかとも思うのです。この疑問を、制度的な問題として片付けることは容易でしょう。たとえば私の場合、日本にいないければ、イギリスに関する知識の落差という文化資本を元手に、糊口を凌ぐのが難しいとか。しかしそれでは実もふたもない。日本でイギリスを研究するという、相当に不条理な場に身を置いてしまった以上、その不条理を糧に生きる。これが目下、私の提出できる唯一もっともらしい答えです。とはいえさらに、なぜそれがもっともらしいのかと問われれば、不条理にも主任になってしまった私にはそんな答えがふさわしいという、擬似的な条理を持ち出す他はなく、結局、最初の「なぜ」へと悪循環してしまうのですが。

映画の「ユートピア」から

— ニュージーランド映画の現在 —

中尾まさみ

去る5月12~14日、東京六本木で日本では初の「ニュージーランド映画祭」が開催された。ニュージーランド映画が日本で上映されるチャンスは、まだまだ限られている。比較的話題になったのは、「ピアノ・レッスン」と「クジラの島の少女」くらいだろうか。だが、前者は厳密にはオーストラリア映画だし、後者もドイツとの共同製作で、先日立ち寄ったレンタル・ビデオ・ショップでは、「ヨーロッパその他」と分類

されていた。

とは言っても、私たちは、ニュージーランドの映画人たちには予想以上に出会っている。例えば、「ジュラシック・パーク」のサム・ニール、「グラディエーター」や「ビューティフル・マインド」のラッセル・クロウはいずれもニュージーランド出身の俳優だし、「ロード・オブ・ザ・リング」「キング・コング」のピーター・ジャクソン監督は、今やもっとも有名なニュージーランド人の一人だろう。映画界の才能が、こうしてハリウッドへと流出することは、自国の映画産業の貧困を物語ると嘆くべきなのかも知れない。実際、ニュージーランドの映画館で上映される映画の多くはハリウッド製だし、そうした映画を見て育った俳優や監督志望の若者が、彼地を目指すのも不思議はない。俳優養成の学校には、「アメリカ英語」という科目が設けられている。

またここ数年の、ロケ地としてのニュージーランドの人気は、目を瞠めるものがある。しかも驚くべきことは、それがありとあらゆる場所に変えらるということだ。「ロード・オブ・ザ・リング」の中つ国、ナルニアや「キング・コング」のスカル・アイランドのようなファンタジーの舞台もさることながら、シルヴィア・プラスとテッド・ヒューズの結婚生活を描いた「シルヴィア」でダニエルのオタゴ大学は50年代のハーバード大学に変身し、「ラスト・サムライ」に至っては、タラナキ山を富士にみだてて明治の日本を出現させている。ロケに行けない場所は、ファンタジー空間ばかりではない。150年前の日本の風景を、今の日本で実際に撮影するのは至難の業だろう。本物より本物らしい風景。ニュージーランドは、いわば映画の中のみ存在するユートピア(=どこでもない土地)を提供しているのだ。

そのことは、実はニュージーランド映画人の海外流出と関係がある。ピーター・ジャクソン監督のみならず、「シルヴィア」のクリスティーン・ジェフス監督もニュージーランド人であり、「ラスト・サムライ」の製作にもニュージーランドを代表する監督の一人、ヴィンセント・ウォー

ドが入っているのだ。海外で映画の作り手となったニュージーランド人が、自国の風景を透明化してそれらの映画に忍び込ませているというわけだ。

こうして海外を経由することで力をつけたニュージーランド映画人がロケを積極的に自国に招致し、それに伴って特撮技術の提供などにも評価を得るようになって、ニュージーランド映画界はかつてない勢いを手にした。映画祭の開催も、そのひとつの表れである。と同時に、彼らは今、ある岐路に立たされているように見える。つまり、自国をいかに描いてゆくか、というその方法についてである。

映画祭の目玉商品「リバー・クイーン」は、美しい自然を背景に、19世紀半ばのマオリとイギリス軍の抗争を壮大に描いたが、そこには明らかにハリウッド映画の文法と、海外の市場に向けた分かりやすさと独自性(エキゾティシズムと言っては言い過ぎか)を旨として再構築された自国のイメージ(「本物」のニュージーランド)の発信が意図されているように感じられた。

一方、フィジーからの移民三世代的心情を大家族の一日に集約した「No. 2」や、繊細な心理描写で小さな町の閉塞的な空気を肌感じさせた「父の私室」は、等身大のニュージーランドの姿を凝視しようとする、この国本来の映画の成熟を示していたように思う。もっとも「No.2」の主演、フィジー人の家長のおばあちゃんをみごとに演じたのは、ハリウッドからやってきたアフリカ系アメリカ人のベテラン女優ルビー・ディーだったのだが。

イギリス科研究室移転のお知らせ

去る3月末、イギリス科研究室は、従来の8号館317号室から、9号館の320&323号室(ふた部屋)に、一時的に移転致しました。これは、8号館の改修工事に伴う仮住まいです。来年の3月には、再び8号館に戻る予定となっております。

11月のホームカミング日ご参加の折には是非、この今年度限定のイギリス科研究室(仮)にお越しください。

訃報

イギリス科15期生(1967年3月卒業)の岩崎慧蔵さんが、2005年1月6日、脳髄膜炎により逝去されました。

戒名：賢光院慧月良智居士
菩提寺：栃木県藤岡町 曹洞宗 繁桂寺
(はんけいじ Tel/Fax 0282-62-2139)

お寺へのお墓参りは自由にできますが、ご遺族への弔問や電話などはお控えください(ご遺族のご意思です)。

イギリス科遠足！！

6月25日(日)、イギリス科の皆で遠足に行きましょう！！

今回のイギリス科分科旅行は、24～25日の一泊で、三浦海岸で行われますが、その流れで、25日の日曜日に、城ヶ島～油壺の小遠足を計画しております。ご参加の方は、お手数ですが british@ask.c.u-tokyo.ac.jp までご一報下さい。詳細をご連絡致します。



2006年度イギリス科カレンダー

- 5月 進学ガイダンス
- 6月 第1回卒論中間発表会(24日)
分科旅行(24～25日)
卒論題目提出(30日)
- 10月 進学ガイダンス
博論題目届提出(12-20日)*
- 11月 ホームカミングデイ
第2回卒論中間発表会
内定生歓迎会
修論題目届提出(8-16日)
博論提出(17-30日)*
卒論最終題目提出(30日)
- 12月 修論提出(13-21日)
- 1月 卒論提出(16日15時締切)
- 1月末～2月初
卒論最終発表会
- 3月 卒業式・卒業パーティ

*在学3年以内の提出者にのみ適用。
それ以外は随時受付。